

赤いバナナ

バナナは誰もが黄色いものだと思っている。ところが、意外なことに赤いバナナもあるのだ。バナナ研究家の国立大の先生も知らないらしい。赤いのは包んでいる皮の部分で、中身までが赤いわけではない。味は普通のバナナより反っておいしいくらいである。どういうわけだろうか、ビルマ（現ミャンマー）の旧首都ラングーン（現ヤンゴン）から新首都ピンマナ（現ネピドー）方面へ 260 km ばかり北上した、トウングー地方だけに群生する。

かつて旧陸軍航空隊の巡拝団に随いてビルマへお供したとき、不意に「あ～、赤いバナナが食いてえな」と誰かがつぶやいた。戦時中戦火の中で食べた赤いバナナの味が忘れられないのだと言う。すると誰も彼もが子どものように「赤いバナナを食いてえ」と言い出し、一瞬にして「赤いバナナ症候群」に陥った。最初にその話を聞いたときには赤いバナナなんて信じられなかった。トウングーは、かつて王朝のあった大きな町ではあったが、いまや史跡は崩落して古都の面影を留めず、ほとんど観光資源がない。外国人が訪れるような宿泊施設もなく、足の便も悪く、普通ではとても訪れる機会のない思い出だけの町だった。「赤いバナナ」は青春の束の間の思い出に終りそうだった。

ところが、いまと違ってネ・ウィン大統領以下当時のビルマ政府要人のほとんどは、日本の陸軍士官学校留学経験を持ち親日的で、帝国軍隊になお憧れと郷愁を抱いていた。彼らは、再三にわたる旧陸軍航空隊の熱望を聞き届けてくれ、その数年後トウングー旧日本軍航空基地へチャーター機を飛ばしてくれた。「赤いバナナ症候群」の元兵隊さんたちは、戦友の慰霊を兼ね 30 年ぶりに赤いバナナを食べにビルマへ飛んだ。

ラングーン育ちの若いガイドを煙に巻きながら、バスの中でもうわ言のように「赤いバナナ」「赤いバナナ」と叫び続けていた兵隊さんは、トウングー基地へ到着するや呆気にとられているガイドを尻目に「青物市場」へバスを直行させた。市場では早速山積みになっている夢にまで見た本物の「赤いバナナ」にありついた。「戦争中のバナナも旨かったけど、いまは弾が飛んで来ねえからいい」とむしゃぶりついていた無邪気で、平和な光景が忘れられない。あのときの赤いバナナは本当に旨かった。（近藤）